

平成新山フィールドミュージアム拠点施設おける観光動態調査

長崎大学大学院 学生会員○末吉龍也 長崎県 正会員 其田智洋
長崎大学工学部 フェロー 高橋和雄 長崎大学工学部 正会員 中村聖三

1. まえがき

雲仙普賢岳の火山災害を受けた島原市と深江町では、復旧・復興事業が順調に進み、火山観光・火山学習体験の場となる雲仙岳災害記念館、道の駅『みずなし本陣ふかえ』（土石流被災家屋保存公園）、大野木場砂防みらい館および平成新山ネイチャーセンターなどの拠点が整備されている。これらの拠点と従来の観光施設である島原城、武家屋敷などとの連携を図り、順調な入込み客を宿泊に結びつけることが、地域の活性化に不可欠である。そこで、島原地域において、地域の行政、住民一体となって、平成新山の景色や災害遺構、火山関係の施設などをまるごと一つのフィールドミュージアムとして構想し、施設間のネットワーク化を図っている。本研究では、平成15年度の調査¹⁾を踏まえ、この構想の中核となる4施設、旧来型の観光施設の代表である島原城および平成16年に新しく雲仙天草国立公園地域にオープンした雲仙お山の情報館において観光客アンケートを実施し、観光行動、構想の評価、整備要望などを分析する。

2. 調査概要

アンケート調査は平成16年11月6、7日の両日に島原市と深江町の雲仙岳災害記念館、道の駅『みずなし本陣ふかえ』（土石流被災家屋保存公園）、大野木場砂防みらい館（大野木場小学校被災校舎）、平成新山ネイチャーセンター、旧来の観光施設の代表である島原城および平成16年に新しく雲仙天草国立公園地域にオープンした雲仙お山の情報館の6施設で実施した。施設の見学を終えた観光客を対象に、面談に方式によってアンケートの回答を得た。6施設の回答者数は、それぞれ91人、112人、50人、52人、78および101人の計484人である。

3. 観光動態調査結果

3.1 回答者属性

居住地についてみると、「福岡県」（26.1%）、「長崎県」（18.3%）、「熊本県」（17.8%）が多く、九州8県で80.0%を占めている。九州圏外の観光客は九州圏内の観光客に比べてやや少ない。

3.2 観光客の行動

旅行の宿泊日数は、「1泊」が56.4%と全体の半数以上を占める。次いで「日帰り」（27.4%）、「2泊」（9.4%）、「3泊以上」（6.3%）となっている。また、「旅行で宿泊する」と回答した観光客に島原市内での宿泊日数について聞いたところ、「宿泊しない」が58.5%と半数以上を占めている。「宿泊」は40%程度であり通過型の観光行動パターンが見られる。そこで、どういった旅行コースをとって島原市内に訪れているのか聞いたところ、雲仙温泉街（雲仙仁田峠を含む）が57.2%、島原市内の観光客は「雲仙温泉街」と結びつきが強い。つまり、宿泊地が「雲仙温泉街」で、行きや帰りに島原に立ち寄っていることがわかる。「長崎市内（グラバー園、平和公園など）」（18.8%）、「小浜温泉」（16.4%）、「熊本（阿蘇、熊本城など）」（10.2%）、「ハウステンボス」（2.3%）となっている。「ハウステンボス」との結びつきは小さい。また、陸路（自家用車）を利用した観光客を対象に島原までの経路を聞いたところ図-1の結果が得られた。「国道57号」の利用が41.4%と最も多い。島原市の観光客は、雲仙温泉街との結びつきが強いいため、島原市と雲仙温泉街を結ぶ「国道57号」の利用が多いと考えられる。このことから雲仙温泉街と島原市内とを結ぶコースができていていることがわかる。

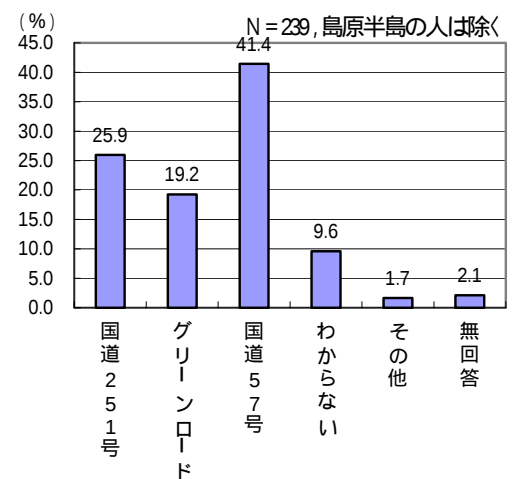


図-1 島原までの経路

キーワード：火山災害 フィールドミュージアム アンケート調査

連絡先：〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学 TEL 095-819-2610 FAX 095-819-2627

次に、島原市内を訪れてからの旅行コースをみると、火山関係施設の観光客の 35%～42%は「島原城」に立ち寄っており、「島原城」との結びつきはできつつある。同じく、「島原城」の観光客は、「武家屋敷」、「道の駅」および「雲仙岳災害記念館」には、その 35%～40%が立ち寄っている。しかし、「雲仙岳災害記念館」、「道の駅」および「島原城」の観光客は、「大野木場砂防みらい館」および「平成新山ネイチャーセンター」には立ち寄っていない。

また、「大野木場砂防みらい館」および「平成新山ネイチャーセンター」の観光客は、「島原城」、「雲仙岳災害記念館」および「道の駅」に立ち寄っている（表-1）。

33 島原観光に必要な整備

島原への順調な入込客を得るためには、まず情報提供（情報源）の確立が必要であると考え。そこで、今回の島原への旅行のきっかけとなった情報源について聞いたところ、「友人・知人に勧められて」とする口コミが 279%とトップである。次いで「雑誌・旅行ガイドブック」が 240%、「観光パンフレット」が 175%となっている。「友人・知人に勧められて」は地域に関係なく多いことは注目に値する。また、パソコンの普及率が高いにも関わらずインターネットで情報を得た観光客が少ない。今後検討すべき課題の一つである。また、情報源から満足のいく結果が得られたかをみると、「十分得られた」と「だいたい得られた」を合計すると 78.6%を占めており、情報源の満足度は高い。

観光客の島原までの移動手段としては、「自家用車」が 62.9%と最も多い。そこで、陸路（自家用車）による交通をより良くするために今後の交通整備の要望について聞いたところ、「観光案内板の整備」が 33.4%と最も多い。「大野木場砂防みらい館」、「平成新山ネイチャーセンター」および「島原城」では、半数近くに達している。「平成新山ネイチャーセンター」では、各整備要望が他の施設より平均的に多い。平成新山フィールドミュージアム構想で一部実施されている「市内観光地を巡る循環バス、乗り合いタクシーの運行」のニーズは 8%程度である（図-2）。

34 平成新山フィールドミュージアム構想の評価

構想の周知状況については「良く知っていた」（84%）、「だいたい知っていた」（8.6%）と約 17.0%が「知っていた」と回答している（図-3）。このように、周知状況はまだ低い。居住地が長崎県から離れていくほど「知っていた」が少なくなっている。そこで、構想を知ってもらうためにはどうしたらよいか聞いたところ、「テレビ・ラジオを使用したコマーシャル」が 60.8%と最も多い。次いで、「新聞・雑誌による紹介」（41.3%）、「平成新山フィールドミュージアムマップのインターネット版の作成」（29.2%）が多い。九州圏外は、「平成新山フィールドミュージアムマップのインターネット版の作成」が九州圏内に比べて多い。島原市に来る前の情報が重要視されており、島原に来てからの情報（パンフレット、観光案内板、道路案内板）よりも多い。

4 まとめ

今回のアンケート調査をもとにした構想に対する提言については講演時に発表する。なお、調査するにあたり財雲仙岳災害記念財団、長崎県の支援を得たことを付記する。

参考文献 1) 末吉龍也, 高橋和雄, 中村聖三, 其田智洋: 平成新山フィールドミュージアム構想の推進に関する観光客アンケート調査 第59回土木学会年次学術講演会講演概要集, IV-186 2004.9

表-1 島原市内での旅行コース(複数回答)

項目	雲仙岳災害記念館 (N=91)		道の駅 (N=112)		大野木場砂防みらい館 (N=50)		平成新山ネイチャーセンター (N=52)		島原城 (N=78)	
		%		%		%		%		%
島原城	35	38.5	47	42.0	21	42.0	18	34.6	-	-
武家屋敷	20	22.0	28	25.0	13	26.0	11	21.2	34	43.6
白土湖	1	1.1	5	4.5	1	2.0	3	5.8	12	15.4
雲仙岳災害記念館	-	-	24	21.4	15	30.0	24	46.2	31	39.7
道の駅	36	39.6	-	-	11	22.0	30	57.7	27	34.6
大野木場砂防みらい館	7	7.7	6	5.4	-	-	6	11.5	3	3.8
平成新山ネイチャーセンター	3	3.3	5	4.5	2	4.0	-	-	2	2.6
その他	5	5.5	8	7.1	2	4.0	4	7.7	1	1.3

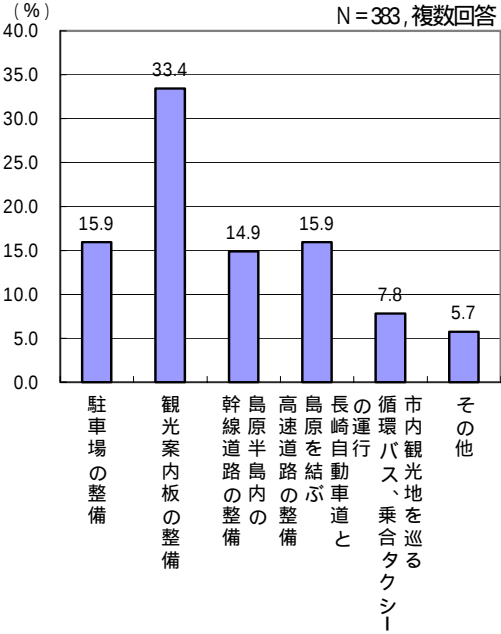


図-2 観光に必要な交通整備

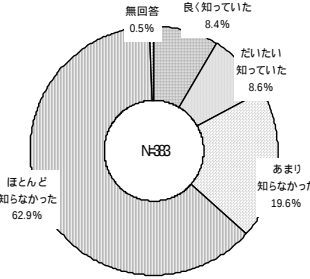


図-3 構想の周知状況